様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2010～2014
課題番号：２２３２００６９

研究課題名（和文）敦煌文献中に見られる唱導資料の総合的研究

研究課題名（英文）A Study of Changdao in Dunhuang Manuscripts

研究代表者
荒見　泰史（ARAMI, HIROSHI）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：３０３８３１８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、敦煌文献中の唱導資料の収集整理を通じ、そこから唐五代時期の仏教儀礼の変化、及びそこから発生したと考えられる芸能、文学の発展について明らかにしようとしたものである。
　敦煌文献には、儀礼に用いられた次第や各作法の記録などが多く残される。本研究では、こうした文献資料から後代の文学に関わりが強いとみられる資料を広く調査、分析を行った。とくに、8世紀後半頃から流行したとみられる七言の韻文による浄土讃などの謡い物や、駢儷調の美辞麗句を読み上げる荘厳文などの一連の願文類の分析を通じて、後代の文学文献にもおおくこれらの痕跡が多く残されるとおり、講唱文学の発展に極めて重要な資料であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Through written sources concerned with changdao from among the manuscripts of Dunhuang, this study elucidate changes in Buddhist ritual during the Tang and Five Dynasties periods and developments in performing arts and literature engendered by these changes. Many important sources such as procedural manuals employed in ceremonies and rites and records of ritual protocols are extant within the Dunhuang corpus. In this study, we will conduct a broad examination and analysis of written works in the Dunhuang corpus that appear to be related to the literature of later dynasties. We believe that through an analysis of choral works such as Pure Land hymns, written in seven-syllable verse form and popular from the later half of the 8th century, as well as a series of yuanwen prayers, which featured parallel prose of an ornamental nature, we can we can clarify the concrete processes associated with the development of these changdao literary genres seen in the literature of later dynasties.

研究分野：中国文学

キーワード：敦煌　仏教　儀礼

１．研究開始当初の背景

本研究は、敦煌文献中の唱導資料の収集整理を通じ、そこから唐五代時期の仏教儀礼の変化、及びそこから発生したと考えられる芸能、文学の発展について明らかにしようと考えたものである。

この時代以降の東アジアの仏教儀礼と芸能、文学の発展には密接な関係があることはすでに多く指摘されるところである。中国における俗講や講経文、変文から雑劇、話本等への発展、日本における法会から延年、琵琶法師による説話、説経節への発展、朝鮮半島における法会に付随する様々な芸能の発展などは代表的なものであり、それらが中国、朝鮮半島、日本を中心とする東アジア各国の後代の芸能、語り物文芸へと大きな影響を及ぼしたことはすでによく知られている通りである。そして、こうした文芸の重要な基礎の部分を作り上げたのが東アジアの規範と秩序を発信してきた唐王朝とその時代の宗教界、とくに安史の亀後の唐王朝後半における彼らの働きであったことは疑いがないのである。さらに言えば、唐王朝の皇族や高級官僚層に支持され国の平和と安定を祈願する儀礼を中心として膨張を続けていった仏教界が、唐後半になってからは経済的拠り處を地方政権から庶民の層にまで裾野を広げていったという歴史的事実はきわめて重要で、こうした歴史的変化の流れの中で、法会の参拝者層の下層へ向かう変化とともに、庶民との接近のための文芸、文学の必要性も増し、結果的に芸能、文学に大きな影響を及ぼすことになったと考えられるのである。

２．研究の目的

こうした時代の宗教界の動きを知る為の資料は、儀礼が人間行動を中心とするものだけに文献資料は限定的で、今日に継承された儀礼や僅かに残された文献資料に拠ることが多くなるが、上に言うような変化の中でとくに下の層へ行くほど資料は限定的となる。そうした中で、20 世紀初頭以降に発見された膨大な敦煌文献などの出土資料は、こうした時代の、しかも地方政権である節度使支配下の寺院で実際に使用されていた文書を中心としている為に、多くの法会の次第や、各作法で唱えられる文、さらにはそうした法会の影響のもとに作られた芸能や講唱文芸の台本に至るまでが残されている。まさに東アジアの文学を考える上での重要な資料庫であるということができるのである。具体的には、国、地域單位とした儀礼としての護国を祈る仁王経や法華経の講経法会や、鎮魂の為の施餓鬼に関わる法会、また教えを説き広める為の三教論議があり、個人を單位とした儀礼としては預修齋から葬送儀礼、追福齋などと様々な法会の資料が残されている。それぞれの法会で唱えられる文にも、供養、願、讃といった目的によって様々な文体が発展しており、特徴的に見られるものでは、法照の五会念仏法事から発展したと見られる浄土讃類、様々な法会の目的や願いを中心とする願文類が様々な層で実際に使用された形のままで残されている。そして、そうした法会から庶民層にまで裾野を広げた文芸へと影響を及ぼしたものでは、三教論議における余興として発展した芸能に関わる『茶酒論』、『孔子項託相問書』といった對話体小説類、浄土讃から歌い物へと発展したとみられるもの、また法会次第の形式や文辞をそのまま残した幾つかの変文などの講唱文学文献も見られている。

３．研究の方法

筆者は、こうした資料群を唱導資料という名称を用いて研究を試みた。唱導とは、慧皎『高僧伝』等に見られる用語をもととして、日本の平安末期から鎌倉時代にかけて発達した安居院流や三井寺派などの説経の法を称する際に用いられた用語である。

そして日本における唱導は、宗教者による様々なことばに関わる作法を中心として、聴衆を導くための様々な工夫までを広く含む術語として用いられ、その広義の解釈に拠れば時には寺院の装飾たる荘厳や、嗅覚に関わる香火、聴覚に関わる様々な鳴らし物まで含めて考えることもある。しかしこの唱導という用語は、本家であるはずの中国においては、その漢字表記から認知される意味の広さから様々な用例が見られるものの、日本におけるように説経の法やそこから発展した文学の総称として用いられることはあまりない。先の『高僧伝』においては、法会の発展段階において声（美声）、辯（辯舌）、才（才知）、博（博識）の四を唱導の重要な要素とし美声による比喩話等を交えた臨機應変な説教を最上としたと記されるが、唱導を行う法師を指す場合、比喩話等を用いた説法を指す場合、齋会の趣旨「大意」の説明を指す場合など様々である。また『続高僧伝』に拠れば、その後の発展段階では隋の彦琮によって新たな唱導法が作られ旧法が改められ新たな法となったと言うが、具体的には不詳である。さらにその後の唐代の儀礼の形式の発達では次第作法の細分化がおこりそれぞれの作法の技巧化が一層進んだために、個別の儀礼作法を表す術語が発展し、総称としての唱導の語が用いられなくなったという経緯もある。『続高僧伝』において「唱導師」ではなく「雑科声德」として各種の声に関わる作法に優れた名僧の伝を作り上げたのもそのためである。以上のように、唱導という語を、日本におけるように説経の総称として統一的な術語として用いられてきたことは余りないのである。それを、本研究で敢えてこうした法会のことばに関わる作法とその文体を唱導の名によって総称としようとしたのは、主として①各儀礼作法に関わる文体を個別に研究するばかりではなく相互の影響関係を考える為に様々な文体を一つの枠でくくる必要があると考えたことと、②日本や朝鮮半島の関連する研究領域とリンクさせて考える必要を感じたこと、の二点に拠る。とくに、敦煌文献のような当時実際に使用されていた文書では様々な儀礼作法が複雑に絡まりあい相互に関連していることが多く、大枠でくくった上での総合的な研究が必要であると思われるのである。

４．研究成果

以上のような考えのもとに、本研究では『敦煌唱導資料の綜合的研究』を題目として以下の様な順で議論を進め、整理を行った。

総論部

総論部では、本研究で扱う唐から五代、宋までの時代背景と仏教界の立ち位置の変化、そして本研究の題目となる唱導という概念についての日本と中国における用例の違いなどの整理、最後に主として資料として扱った敦煌文献の概要と、そこに見られる儀礼関連資料の重要性などについて論じている。

具体的には、第一章では「唐代仏教儀礼及其通俗化」として、本研究で扱う唐五代頃の時代の流れと仏教の儀礼の変化について考えた。とくに、この時代の政治狀況の変化が如何に仏教界の立ち位置に影響を及ぼし、庶民にまで裾野を広げた文学、芸能の発展に繋がったのかを時代をおって考えた。そして、そこには中央集権的な強国から節度使らに拠る地方分権への移行期に、地方勢力との繋がりを強める仏教界の狀況がみられ、またそこには規範化された儀礼から通俗化及び文学、芸能への発展や通俗文学との結びつきが見られるようになることを論じている。

第二章「敦煌文献と仏教儀礼文献」では、敦煌文献の現狀について概觀し、そこに残される法会に関わる文献の重要性について

論じている。そして第三章「敦煌唱導資料研究序説」では、本研究の中心となる唱導という概念について、とくに中国における仏教伝來以前の中国におけるものから仏教伝來後の用例までの整理を行った。そしてそこに発する変化と多様な用例について考えつつ、日本における用法と對比させ、本研究で唱導の語を用いる意義について論じた。

第Ⅰ部　唱導と文体

第Ⅰ部では、敦煌文献に残される儀礼時に讀み上げられたと見られる文を個別に取り上げて論じている。とくに、それらが如何に使用され、後に文学文献にどのように影響を及ぼしたかについて考えることをここでは主たる目的としている。

とくに第五章から第八章では、浄土五会念仏法事等に使用され流行した讃、いわゆる浄土讃の発展と変化について検討している。インドより伝來した stotra は、唐中期以降は唐詩の流行とともに平仄の整った近体詩の文体へと変容して様々な儀式で唱えられるようになり、文学、芸能にも大きな影響を及ぼすようになる。そうした発展の経緯について、安史の亂後に新たな時代の仏教界の中心的人物として活躍した法照や法照を崇敬する組織の活動や、その後の法会での讃文の使用といった角度から、文学文献への具体的発展関係について論じた。具体的には、第五章以降では、讃から押座文へと発展した例、讃から変文の韻文の一部として使用されるようになったものまでを実例を擧げて論じ、発展がより明確になるよう論じた。第七章では、このような讃の流行の背景に法照とその弟子や信徒たちの活動があることを指摘し、とくに法照を熱狂的に崇める一派には、『浄土五会念仏誦経觀行儀』など依拠する文献をもとに改変し、法照の靈驗譚を交えた唱導を行うなどの活動があったことを突き止め、その活動について論じた。

第Ⅱ部　諸儀礼と唱導

第Ⅱ部では、敦煌で行われていた様々な儀礼を中心として、その儀礼に関連する文献を整理し、そしてそれらの儀式の中で様々な文体がどのように使用されていたか、そしてその儀礼と文が如何に展開して文学に影響を及ぼしたのかについて考えている。

第一章から第四章までは『受八関齋戒文』、『地蔵菩薩十齋日』、『仏説十王経』といった資料により個人の修身や追福の供養を中心に考え、預修齋という修身を中心とした儀礼から追福供養へ、そして仏教による葬送儀礼の発達に至る経緯とその時代狀況を考えている。また、そうした時代変化の中で、こうした儀礼の中にも芸能、文学が徐々に大きく関わっていく過程も見てとることができ、中には『俗講荘厳廻向文』を用いる作法、浄土讃を讀む作法が加えられつつ、俗講、変文への発展関係を持つと見られるものも少なからず有ることが確認できることを論じている。

第五章では「溫室経講経與俗講、唱導」として仏道の洗浴供養の発展を論じ、法会における洗浴供養の位置づけや、9、10 世紀の洗浴供養と俗講の関係などについて論じている。

第Ⅲ部　仏教儀礼から芸能、文学へ

第Ⅲ部では、主として仏教儀礼から発展したと見られる芸能、文学を中心として論じている。このテーマでは、敦煌の講経文、変文などが代表的としてしばしば取り上げられるが、実のところ筆者はすでに『敦煌変文写本的研究』、『敦煌講唱文学写本研究』の二著でこの問題は重点的に取り上げたことがあるのでここでは大きくは触れず、仏教儀礼と関わる当時の芸能、文学について、法会における唱導という寺院活動から芸能、文学への変化を中心とした個別的な問題をいくつか取り上げるのに留めている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

1．荒見泰史、「唐代仏教儀礼及其通俗化（下）」、『アジア社会文化研究』、第 16 号、25-45 頁、2015 年、査読有り

2．荒見泰史,「敦煌本十斎日資料與斎会、儀礼」、『敦煌吐魯番研究』第 14 巻、379-402 頁、2014 年 12 月、査読有り

3．荒見泰史、「温室経講経與俗講、唱導」、『出土文献研究視野與方法』第五輯、国立政治大学中国文学系編印、217-244 頁、2014 年、査読有り

4．荒見泰史、「敦煌本『仏説十王経』与唱導」、『中国俗文化研究』、178-192 頁、2014 年、査読有り

5．荒見泰史、「二月八日の出家踰城と敦煌の法会、唱導」、『敦煌写本研究年報』第 8 号、31-45 頁、2014 年、査読有り

6．荒見泰史、「唐代仏教儀礼及其通俗化（上）」、『アジア社会文化研究』、第 15 号、21-46 頁、2014 年、査読有り

7．荒見泰史、「遊僧與芸能」、『敦煌吐魯番研究』、第 13 巻、79-96 頁、2013 年、査読有り

8．荒見泰史、「浄土五会念仏法事与八関斎、講経」、『政大中文學報』、第 18 期、57-86 頁、2012 年、査読有り

9．荒見泰史、「敦煌講経文類と『東大寺諷誦文稿』よりみた講経に於ける孝子譚の宣唱」、『敦煌写本研究年報』第 7 号、69-90 頁、2013 年、査読有り

10.ARAMI Hiroshi (荒見泰史): The Tun-huang *Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen* 俗講荘厳廻向文 and Transformation Texts , ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture No.105 (Published Aug.2013) 、pp.81-100、査読有り

11．荒見泰史、「敦煌的唱導文学文献」、『項楚先生欣開八秩頌寿文集』、中華書局、48-61 頁、2012 年、査読有り

12．荒見泰史、「敦煌本《斎琬文》等諸斎願文写本的演変」、『敦煌学』第 29 輯、119-148 頁、2012 年、査読有り

13．荒見泰史、「敦煌の喪葬儀礼と唱導」、『敦煌写本研究年報』第 6 号、27-40 頁、2012 年、査読有り

14．荒見泰史、「講史類変文とその空間」、『軍記と語り物』第 48 号、30-40 頁、2012 年、査読有り

15．荒見泰史、「敦煌本慧淨《温室経疏》小識」、『仏教文学研究論集続編』、復旦大学出版社、398-419 頁、2011 年、査読有り

16．荒見泰史、「敦煌本《受八関斎戒文》写本の基礎的研究」、『敦煌写本研究年報』第 5 号、129-150 頁、2011 年、査読有り

〔学会発表〕（計 21 件）

1. 敦煌文獻より見た唐五代の女性を取り巻く社会環境、国際研究集会『東アジアの宗教儀礼－信仰と宗教の往還』、（名古屋大学）愛知県・名古屋市、2014年12月13日、14日、荒見泰史

2. 九、十世紀中國齋會的隆盛與十王信仰、“重繪中古中國的時代格：知識、信仰與社會的交互視角”國際學術研討會、（復旦大学）中国、2014年11月8日、荒見泰史

3．The Dunhuang Manuscript of the *Chajiulun* and Comic Theatrical Performances at Buddhist Assemblies, リュブリャーナ大学フォーラム･書物とことばの仏教文化史（リュブリャナ大学）スロベニア、2014 年 8 月 31 日、荒見泰史

4．仏教儀禮の構造と文體、中国中世写本研究 2014 夏期大会、（京都大学）京都府・京都市、2014 年 8 月 23 日、荒見泰史

5．韓国東海三和寺水陸斎調査報告、中国俗文化国際研討会（四川大学）中国、2014 年 7 月 12 日、荒見泰史

6．法照門徒的念仏法事与《法照伝》的宣唱、第 4 届東亜宗教文献国際研討会（国立政治大学）台湾、2014 年 3 月 16 日、荒見泰史

7．敦煌本《五台山讃文》与念仏法事、斎会、敦煌、吐魯番国際学術研討会（成功大学）台湾、2013 年 11 月 16 日、荒見泰史

8．温室経講経与俗講、唱導、敦煌文化与唐代文学国際学術研討会（蘭州大学）中国、2013 年 9 月 13 日、荒見泰史

9．The Ten Kings Worship and Prosperous Rituals in China During 9th and 10th century、***Religious Performance, City and Country in East Asia***（イリノイ大学）アメリカ、2013 年 9 月 10 日、荒見泰史

10．敦煌本十斎日資料与斎会、儀礼、敦煌吐魯番国際学術研討会（首都大学）中国、2013 年 8 月 20 日、荒見泰史

11．韓国東海三和寺水陸斎調査報告、歴博・共同研究「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」（国立歴史民俗博物館）千葉県・佐倉市、2013 年 4 月 27 日、荒見泰史

12．敦煌本十齋日資料と齋會、儀禮、第 3 回東アジア宗教文献国際研究集会（明海大学）千葉県・浦安市、2012 年 3 月 17 日、荒見泰史

13．遊僧与芸能、中国古代文学文献国際学術研討會暨中華文学史料学学会古代文学史料研究分会 2012 年年会（四川師範大学）中国、2012 年 8 月 21 日、荒見泰史

14．敦煌本孝子故事類の展開と日本殘存資料、京都大学人文科学研究所国際ワークショップ敦煌写本と日本古写本（京都大学）京都府・京都市、2012 年 7 月 7 日、荒見泰史

15．敦煌本『仏説諸経雑縁喩因由記』の内容と唱導の展開、説話文学会 50 周年記念大会シンポジウム説話と資料学、学問注釈—敦煌・南都・神祇—（立教大学）東京都・豊島区、2012 年 6 月 24 日、荒見泰史

16．敦煌本『俗講荘厳迴向文』と變文、第 57 回国際東方学者会議シンポジウム I 日中『願文』の比較（日本教育会館）東京都・千代田区、2012 年 5 月 25 日、荒見泰史

17.“浄土五会念仏法事”と八関斎、講経、第 2 回東アジア宗教文献国際研究集会（広島大学）広島県・東広島市、2012 年 3 月 19 日、荒見泰史

18．敦煌本《仏説十王経》與唱導、第四届中国俗文化国際学術研討会（四川大学）中国、2011 年 10 月 30 日、荒見泰史

19．敦煌本讃文類と唱導、變文——太子讃類から押座文、講唱體への發展を中心として——SOAS 研究集会前近代の日本における新たな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響（ロンドン大学）イギリス、2011 年 5 月 11 日、荒見泰史

20．敦煌本『齋琬文』と諸齋願文写本研究——唱導文學との關係をめぐって、第 1 回東アジア宗教文献国際研究集会（筑波大学）茨城県・つくば市、2011 年 3 月 10 日、荒見泰史

21. A Study of the Dnuhuang Manuscript *Tantra of the Eight Precepts of Abstinence*、Religious Texts and Performance in East Asia（イリノイ大学）アメリカ、2010 年 10 月 7 日、荒見泰史

〔図書〕（計１件）
荒見泰史、「敦煌唱導資料の総合的研究報告書（稿）」、広島大学敦煌学プロジェクト研究センター、2015 年 3 月、1-461 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
荒見　泰史（ARAMI , hiroshi）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：30383186

(2)研究分担者
遊佐　昇（YUSA , noboru）
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：40210588